

平成30年1月29日

# 敬愛短大附属幼稚園だより 2月号

12月中旬、ソニー教育財団が全国の幼稚園・保育所・認定こども園から「科学する心」を育てる事を中心に募集した論文「ソニー幼児教育支援プログラム」の結果が発表されました。

昨年は前年の109園・所を超える126園・所から応募があり、その多くは継続応募です。本年度当園は参加賞となり、ソニー製のデジタルカメラをいただきましたので、これからの子どもたちの活動に役立てて行きたいと考えています。（当園のホームページに既に応募論文の全文を掲載していますので是非ご覧ください）

そこで、次年度の取り組みとして、既に9月の論文の応募直後から次年度の計画を検討し、一部は実践に移しています。また、先日は、元ソニー教育財団にお勤めされていた方に来園していただき、当園は埋め立て地でもあるため、この少ない自然環境をどのように工夫して改善していくかについて指導をいただきました。この方は緑町中、山王中、打瀬中、小中台中等の校長先生をされ、すべての学校で学びに役立つ自然環境を研究しながら実際に作り上げてこられました。

また、初めて来園された当日から、堆肥作りのために米ぬかを用意していただきました。動植物環境としての現在の環境を学びに役立てられるように工夫するかは幼稚園の大きな課題でもあり、逆に工夫の余地のある楽しい課題でもあります。植物もただ植えるだけでなく、学びに役立てられるような多様で計画的な視点を待つことが私たちには必要です。

一方、打瀬小学校に隣接する「打瀬ふれあい緑地」の中に「幕張ベイタウン・エコパーク」が高原環境財団助成事業として市民の手で作られており、子どもたちが身近な場所で、失われた自然環境が戻って来る様子を発見したりしています。このエコパークには蜂も生息していて、刺されたら危険と思い避けがちですが、本来、自然とはそうした環境下にあるものなので、その中で安全に気をつけることも学びながら様々な動植物がどのように生きているかを観察・体験してほしいという願いがあります。

自然環境が美浜区よりも豊かな緑区では当たり前のように自然が身近にあります。身近にあるがゆえにかえってその事に気がつかない場合もあります。また、日本の各地では失われた里山を復活させたりする取り組みもされていますが、復活させるだけでなく、その自然の中で生活している動植物を学習にどのように役立てるようにしていくかが「科学する心」を育む事につながるものと考えられます。

次年度には幼稚園内に仮称「こども自然研究所」または、「チルドレンズミュージアム」の設置を考えており、名称のほか、内容や運営方法等について年長さんたちが次の年長さんに“つながる”ために考えてくれています。次年度の幼稚園の研究テーマは正に“つながる”です。

私もそのために、かつての原風景の中に当たり前のように存在していた水の中の第一次消費者としての「ミジンコ」を12月中旬から3つの水槽を使い自宅で育てています。自然界ではミジンコは魚たちの餌にもなっていますし、ミジンコ自体は生産者である植物プランクトンやバクテリアを取り込んで生活しています。自然界ではミジンコは真冬には見られませんが、我が家の水槽内では短期間に何世代にも渡ってかなりの数が繁殖を繰り返しています。また、よく観察していると、そんなミジンコの生態も見えてきますし、心も癒されてきます。音も出さず、細かな動きをするミジンコですが、さて、子どもたちはどんな事を見つけ出してくれるか楽しみです。

2月には年長さんたちが、市内の青葉の森にある千葉県立中央博物館の見学に行く事になり、先生方は既に年明け早々に事前調査に行っています。博物館の中にはミジンコの専門家もいて幼稚園との連携についても快く承諾していただいております。中央博物館とも“つながる”準備が整っています。全国の大学の研究者もミジンコを研究しているくらい学術的にも価値のある生物です。その意味でも「ミジンコ侮ることなかれ」です。

自ら学ぶということは、すればするほど深いものです。私たちが忘れかけている子ども時代に体験した動植物等と日常的に関わる事を幼児期に経験させたいと考えていますし、更に、自然界の仕組みの精妙さから多くのことを学び、探究させたいと思います。（園長 杉山）